

CEHSOC

News Letter No.1 **RITS**

2006年2月1日発行

プロジェクト

Citizen & Community Empowerment in Health and Social Care

CONTENTS

- ごあいさつ – CEHSOCプロジェクトの立ち上げにあたって 1 P
- 各研究グループ（サブプロジェクト）の紹介 3 P
- プロジェクトイベント報告 4 P
- プロジェクトイベントのお知らせ 7 P

ごあいさつ – CEHSOCプロジェクトの立ち上げにあたって

CEHSOC プロジェクト代表 **松田 亮三**
(立命館大学産業社会学部 助教授)

医療と福祉といった対人サービスにおいていかに患者・利用者の権限を高めるかは、日本だけでなく多くの国で共通の課題となっています。日本においては、この10年間で患者の権利についての多くの議論がなされるとともに、臨床の場におけるコミュニケーションや意思決定のあり方はもちろんのこと、患者・利用者からの医療・福祉政策への参画や地域住民の病院経営への参画が課題とされるようになってきました。

このような中で、立命館大学人間科学研究所では、医療と福祉という領域における対人援助のあり方を考える際に、患者・利用者さらには地域レベルでの力量形成と権限の強化（エンパワメント）をどのようにすすめるかを検討するプロジェクト、「医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクト

(Citizen & Community Empowerment in Health and Social Care Project、CEHSOC Project) を2005年度から立ち上げました。

CEHSOCプロジェクトの特徴は、まず対人援助を受ける人々の力量形成と権限の強化（エンパワメント）にどのような要因が関わっているかを多面的に明らかにしようとすることです。対人援助においてはともすれば援助を行う主体に情報、知識、資金、物品などさまざまな資源が集中しています。しかも、援助を行う主体が援助を受ける側の完全な代理人として振舞うことは、価値観の多様性、援助者を取りまくさまざまな経済的・非経済的インセンティブからみて必ずしも期待できません。そのため、援助を受ける人々がどのような援助を望みどのように援助を受け取っていくかという判断力を強め、援助者と交渉

し実現していく権限の強化を行っていくことが必要と考えられます。このような臨床場面における権限の強化について、それに関わる多様な要因—リテラシー、メディアによる情報提供、臨床的コミュニケーション能力、規制や経済的インセンティブのあり方など—を探る中で、患者・利用者のエンパワメントに接近していきます。

この場合に、対人援助のあり方を医療、福祉という具体的な領域に限定し、対人援助のあり方をそれぞれの領域の制度的また援助関係の特徴をふまえながら検討いたします。対人援助は医療、福祉、教育など多くの場で行われますが、それぞれの援助が行われる場や制度は独特の特徴を持っており、それらがさまざまなルートを通じて対人援助のあり方に影響すると考えられます。そのため、対人援助のあり方を援助の場や援助の背景となる制度の特徴をふまえながら探求していきます。

さらに、制度（マクロの水準）と臨床（ミクロの水準）を媒介するさまざまな組織のあり方（メゾの水準）について、医療・福祉サービスを提供する主体の経営・運営のあり方やサービス利用の周辺において患者・利用者をさまざまな意味で支える組織のあり方、地域社会のあり方、など多様な組織の存在とそのあり方を視野に入れて検討します。

このような研究課題は非常に大きなものではありますが、2005年度においては、以下の5つの研究グループ(RGs)を設けて研究をすすめております。

- ①**制度 RG**：医療・福祉エンパワメントを促す社会制度に関する研究
- ②**組織 RG**：非営利・協同組織における組合員（会員）の「参加」の研究
- ③**地域高齢者 RG**：援助拒否・孤立・潜在化する地域高齢者のエンパワメントに関する研究
- ④**男性介護 RG**：男性介護に関わるエンパワメント・プログラムの開発研究
- ⑤**妊娠・出産 RG**：妊娠・出産に関わる当事者エンパワメントの研究

本プロジェクトは、文部科学省オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究」の採択（2005年度より5年間）を受けて、エンパワメント系医療福祉チームとして参加し研究を行っています。この事業では対人援助に関わる多様な研究が行われており、それらと連携することにより研究をより大胆にまた高い質で実施することにつながることを期待しております。

プロジェクトはようやく立ち上がり動きだしたところですので、ご関心のある方はお気軽にご連絡いただき、より豊かなプロジェクトにしていくためにご協力いただければ幸いです。

最後になりましたが、本プロジェクト立ち上げにご援助いただいている関係各位、特にプロジェクトの趣旨をご理解いただき奨学寄附金を提供いただいている日本生活協同組合連合会医療部会に厚く感謝申し上げます。

各研究グループ(サブプロジェクト)の紹介

CEHSOCプロジェクトには、5つの研究グループがあります。それぞれがどのような研究を進めようとしているのか、簡単にご紹介いたします。

1. 医療・福祉エンパワメントを促す社会制度に関する研究(マクロレベル研究)

松田 亮三
(立命館大学産業社会学部)

医療・福祉エンパワメントを促す社会制度として、住民や利用者の参加権限と力量の形成が、どのようなレベルでどのようになされるべきなのかを、政治参加や組織参加に関わる議論をもとに検討します。近年新たな取り組みが行われている国々の経験を検討するとともに、日本における住民参加や政策形成への参加の現状と課題を検討します。特に、住民参加型の医療機関である医療生協での実態調査とイギリスでの患者サポート組織などへのインタビュー調査を軸に研究を進めていきます。

2. 非営利・協同組織における組合員(会員)の「参加」の研究(メゾレベル研究)

秋葉 武
(立命館大学産業社会学部)

近年、サービス利用者が構成員の一員として組織への「参加」が制度的に保障され、双方向の関係性が存在する非営利・協同組織において「参加の形骸化」が指摘されるようになってきています。その中で、本研究では特に外部環境の変化に伴って「参加」がどのよう

に変容してきたのかを日英の事例を下に明らかにし、外部環境に対応した新しい組織の組合員（会員）の参加の構成要素のモデル化を図っていきます。日本の購買生協および医療生協へのインタビュー・資料収集、イギリスの社会的企業の調査を行う予定をしています。

3. 地域エンパワメントに向けた地域福祉情報の活用に関する研究(ミクロレベル研究)

小川 栄二
(立命館大学産業社会学部)

中川 勝雄
(立命館大学産業社会学部)

高橋 正人
(立命館大学産業社会学部)

ひとり暮らしの高齢者や、高齢者を抱える家族など、地域においてその存在が指摘される援助困難者がいます。地域の中での孤立を防ぐため、その援助を、地域住民の主体的参加による地域福祉情報の形成と活用という視点から検討します。Web型福祉GISシステムの活用を含めて、援助の困難性など地域での生活困難に関わる諸情報を収集し、情報を共有し、地域のエンパワメント（政策的力量の向上、資源の獲得など）につながる活動モデルを検討していきます。京都市上京区における実態調査を計画しています。

4. 男性介護に関わるエンパワメント・プログラムの開発研究(マクロ・ミクロレベル研究)

津止 正敏
(立命館大学産業社会学部)

斎藤 真緒
(立命館大学産業社会学部)

いまや、家族介護者の4人に1人が男性という時代に突入しています。都市部を中心とした高齢夫婦二人暮らし家族世帯の増加を考えると、男性介護者の割合はさらに高まることが予想されますが、男性介護者への社会的関心は低いままです。男性介護者には女性介護者と異なる困難を多く抱えています。本研究では、男性介護者の登場を新たな介護社会形成の兆しと位置づけつつ、男性介護者が自らの生き方の問題を含めて介護に直面していく力量をいかに形成するか、またそれを支える地域のあり方は何かを検討していきます。男性介護者の全国的調査を日本生協連医療部会の協力の下に実施することを計画しています。

5. 妊娠・出産に関わる当事者エンパワメントの研究(ミクロレベル研究)

松島 京
(立命館大学人間科学研究所)

小嶋理恵子
(宮崎大学医学部看護学科)

本研究は、妊娠・出産期を生物学的なイベントとしてだけではなく、関係性が変容する社会的なイベントとしてとらえ、その時期に必要なとされる援助のあり方をさぐるものです。妊娠・出産期は、新しく誕生する子どもを中心とした人間関係が構築される時期です。この時期に援助者が当事者に対してどのような働きかけをしているのか、当事者を中心とした人間関係はそれを受けてどのように変化をしているのか、ということ、当事者・援助者双方へのインタビュー調査をもとに考察し、医療が育児支援に関わることの意義とそこで援助者の役割について検討していきます。

プロジェクトイベント報告

プロジェクトが立ち上がってからこれまでに開催された主なイベントについてご報告します。

第1回 CEHSOC 定例研究会

「病院探検隊の実践から ～病院の運営のあり方についてみえるもの」

2005年12月9日 (於 京都私学会館)

2005年12月9日にCEHSOC定例研究会の第1回目が開催されました。報告者は「さえあい医療人権センターCOML」の山口育子さんです。COMLは医療を消費者の目でとらえ、患者の主体的な医療への参加を呼びかけ

て1990年から活動をしているNPOです。今回は「病院探検隊」というCOML独自の病院評価(点検)活動についてお話ししていただきました。

<参加レポート>

報告では、約60枚の写真を用いてCOMLの行っている病院探検の評価の視点について非常に分かりやすく紹介していただきました。例えば診察室でのプライバシーや、ナースに笑顔があるか、院内の表示は分かりやすいか、待ち時間への対応など、病院の日常業務の中で見落とされがちなソフト面への指摘が公的な第三者評価機関には盛り込まれていない患者の視点特有のものであると感じました。また単なる評価・批判ではなくその後のフィードバックを含め、「この病院に良くなって欲しい」というCOMLの一貫したスタンスとそのためコミュニケーションスキルに感服しました。報告後は参加者から意見や質問が挙げられ、短い時間であったが充実した議論となりました。その中で触れられた、相談



内容の多様化や消費者側の医療への過度な期待という最近の傾向については今後深く見ていきたいテーマでした。(文責：立命館大学大学院社会学研究科・清水誓子)

合同研究会

「高齢者の孤立・潜在化問題をめぐって」

2006年1月9日
(於 立命館大学)

2006年1月9日に、「地域エンパワメントに向けた地域福祉情報の活用に関する研究」内「高齢者の援助拒否・孤立・潜在化問題研究会」主催による合同研究会が開催されました。報告テーマおよび報告者は次の通りです。

「大都市における高齢者の生活と孤立問題について—東京都港区調査を中心に—」

河合 克義氏
(明治学院大学副学長・社会学部教授)

「高齢者の援助拒否・孤立・潜在化問題調査の経過報告」

小川 栄二
(立命館大学産業社会学部教授)

「明治学院大学大学院生、立命館大学大学院生・研修生による関連報告」

第2回 CEHSOC 定例研究会

「健康権 (the right to health) の国際的動向」

2006年1月13日 (於ば・る・るプラザ京都)

2006年1月13日にCEHSOC定例研究会の第2回目が開催されました。報告者は金沢大学大学院社会環境科学研究科の棟居(椎野)徳子さんです。国際的に明文化されている健康権(the right to health)ですが、日本における認知度は高いとはいえません(しかし健康権を規定した国際条約を批准・発効しています)。今回は、健康権の生成とその発展過程、そして今後の議論の方向性について報告していただきました。

<参加レポート>

健康権の生成の過程とその発展の流れについて詳細に説明していただきました。WHO憲章前文に始まり、「世界人権宣言」「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」を経て、国際的にも明文化されていく過程と、WHOのアルマ・アタ宣言やオタワ憲章、それぞれの国際条約機関から出される「一般的意見」を通して、健康権の具体的・普遍的基準の追求されていく発展とにより、現在の健康権をめぐる議論の活発化の背景を知ることができました。また、健康権とは「健康である権利」ではなく、「到達可能な最高水準の健康の実現のために必要な様々な施設、物資、サービス及び条件を享受する権利」である、ということについて確認することができました。そもそも健康とは抽象的で曖昧になりやすいものです。個人の身体上の特質や個人をとりまく環境の多様性から、誰もが同じ状態としての「健康」を提示することは難しいといえ



ます。だからこそ、健康権は、人々の自由と権利と参加の重要性をうたい、「利用可能性」「アクセス可能性」「受容可能性」「質」を指針として提示し、国家がそれを保障することを義務として位置づけているのです。私たちは、医療や福祉の現場における利用者の権利について語る場合、サービス供給形態から、ともすると対医師、対医療・福祉機関、対企業という視点でのみ捉えてしまいます。しかし、健康権を保障するのは国家の義務であることやその内容をふまれば、医療政策や社会保障政策をも展望する視点が必要となるでしょう。そのためにも、日本における健康権の認知度を高めていかねばなりません。また、報告後は多岐にわたる議論が展開されました。あらためて、健康をめぐる複合領域的な共同研究が今後必要であると感じました。

(文責：立命館大学人間科学研究所・松島 京)

プロジェクトイベントのお知らせ

2005年度中に開催を予定しているイベントは次の通りです。参加費はいずれも無料でどなたでも参加できます。お誘い合わせの上、ふるってご参加下さい。

■ 第3回 CEHSOC 定例研究会

「Shared decision making を支える医師の能力養成の現状と課題」

報告者：藤崎和彦氏(岐阜大学医学部医学教育開発研究センター)

日時：2006年2月3日(金) 18:30～20:30

場所：キャンパスプラザ京都 第4演習室(JR京都駅下車)

参加費：無料 どなたでも参加できます

申込方法

- ・御所属・お名前を明記の上、メールかFAXにてお申込下さい。折り返しご連絡いたします。
- ・会場整理の都合上、参加を希望される方はできるだけ事前にお申込下さい。

【主催・問い合わせ先】

立命館大学人間科学研究所 CEHSOC プロジェクト

Tel: 075-465-8358 FAX: 075-465-8245

E-mail: cehsoc@yahoo.co.jp (担当：松島)

■ シンポジウム

「男性介護から考えるこれからの介護社会」

講演者：浅川 澄一氏(日本経済新聞社編集局)

荒川不二夫氏(荒川区男性介護者の会)

阿部 未知氏(東九条訪問看護ステーション所長)

富田 秀信氏(介護当事者・『子どもになった母さんー仕事と妻の介護は綱渡り』著者)

コーディネーター：津止 正敏(立命館大学産業社会学部 教授)

日時：2006年2月18日(金) 14:00～17:00

場所：立命館大学衣笠キャンパス 創思館1Fカンファレンスルーム

参加費：無料 どなたでも参加できます

*本シンポジウムは「臨床人間科学の構築ー対人援助のための人間環境研究」の連続シンポジウムの一つとして実施されます。

【主催・問い合わせ先】

立命館大学人間科学研究所

Tel: 075-465-8358 FAX: 075-465-8245

E-mail: ningen@st.ritsumei.ac.jp

2006年2月1日 発行

立命館大学人間科学研究所 CEHSOC プロジェクト
(医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクト)

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学人間科学研究所

Tel : 075-465-8358 FAX : 075-465-8245

E-mail:cehsoc@yahoo.co.jp (担当:松島)

URL : http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/hs/hs_index.htm